

日本天文学会の創立 75 周年を迎えて

理事長 川 口 市 郎

日本天文学会が発足して天文月報第 1 巻、第 1 号が発刊されたのは 1908 年（明治 41 年）4 月ということである。従って 1983 年（昭和 58 年）4 月に、日本天文学会は創立 75 周年という 1 つのエポックを迎えることになる。天文月報第 50 巻、第 1 号（1957 年、昭和 32 年）には当時の理事長鈴木政岐先生は日本天文学会創立 50 周年をむかえるに当り、学会 50 年を人生 50 年にたとえ、孔子によれば 50 才にして命を知る（致命）、また西洋では 50 才にして rich（富裕）とあり、学会 50 年間の豊富な知識の蓄積があったと感想をのべられている。

日本天文学会の会員数は 50 周年で 820 名（特別会員 196 名；通常会員 624 名）であったが、昭和 57 年 3 月現在 2126 名（特別会員 518 名；通常会員 1570 名；賛助会員 38 名）に増加し、また春秋を併せた学会講演数は 106 から 395 と約 4 倍に増えている。この数字だけでも学会は着実に発展をしているといえる。

私にはこの 25 年間に生じた学問の質の変化は更に目覚ましいものであると思わざるをえない。1957 年といえば、ソビエトの人工衛星第 1 号機が打上げられた年であった。宇宙時代の開幕と共に観測施設の拡充・整備は目覚しく、1960 年には岡山天体物理観測所の 188 cm 鏡による本観測が始まったのを先陣として、1974 年には木曾観測所の 105 cm シュミット望遠鏡、1979 年飛騨天文台のドームレス太陽望遠鏡、さらに 1982 年野辺山宇宙

電波観測所の 45 m 宇宙電波望遠鏡等が完成した。これらの装置はいずれも世界的にみて第一級の観測装置である。また大気圏外からの科学衛星による観測とも相俟って、この 25 年間に日本の観測天文学は見事に開花したといえることができる。

天文学における理論的研究分野についても、電算機の発展は質的な変化をもたらし、若い研究者を中心として電算機を使いこなした研究が着実に躍進しているのは喜ばしいことである。天文学の真の発展とは自前の観測と自前の理論が有機的に結合してはじめて達成されるものであろう。このためには大型の観測器機と共に、厚い天文学者層の存在が必要不可欠であることはいままでもない。75 周年をむかえるに当り、この 25 年間の苦闘の上になしとげられたわが国の天文学における理論および観測的研究成果を思うとき、これを受け継ぎ、更に発展させる責任は、いま、われわれの肩にかかっている。これを機に、尚一層研鑽に励み、切磋琢磨してゆきたいものである。

最後に、日本の天文学をここまで育ててこられた先輩諸賢に深甚な謝意を表わすと共に、次の 25 年間に現在の若い天文学徒が、人類の貴重な財産である天文学にさらに大なる貢献をすることを衷心より希望するものである。

75 年目を迎えた天文月報

成 相 恭 二

今年で天文月報は 75 周年を迎えた。創刊は明治 41 年 4 月である。読者諸兄も多くは第 3・第 4 世代に属しておられて、天文月報の年令に特別気も止めなかった方も少くはあるまい。筆者もそのような仲間の一人である。

昭和 32 年 1 月号に「天文月報 50 年の歩み」と題した下保茂氏の文がある。創刊のころ、大正から昭和にかけて、戦中戦後の 3 期にわけてまとめている。この稿はそれ以後のことについて記すことにする。なお創刊号表紙を写真で示す。

川口理事長の文にもあるように、この 25 年間は日本の天文学が大きく発展した時期である。それと共に本誌の内容も充実してきている。例えば第 50 巻は総ページ数 210、解説記事は 1 号に 1 つの割合に対して本 75 巻は 352 ページ、解説記事は 1 号に 2 乃至 3 の割合である。表紙も一色刷りから 2 色刷りになり、時々カラー印刷も用いられるようになった。2 色刷りは 55 巻（1962 年）からで、この年の 1 月号にカラー表紙が初めて用いられた。表紙写真が大きくなったのは 58 巻（1965 年）である。表紙にはなるべく日本で作られた観測装置の写

Vol. L No. 12 THE ASTRONOMICAL HERALD April, 1908

Published by the Astronomical Society of Japan.

天文月報

號壹第卷壹第 月四第—十四治明

明治四十一年三月二十九日出版 第三千二百九十九号

發刊の辭

理學博士 寺尾 壽

天文學に對して世間に二つの誤解あり、第一天文學は唯だに高尚にして實用に遠しいこと、第二天文學は微細難解なる數字の結合にして、素人には到底其門扉を開き得られぬ者といふことなり。

第一の誤解に就きては特は多く言ふことを要せざるべし、彼の世に最も實用的と稱せられたる支那民族が數千年の古より今日に至るまで大聖人として崇敬する所の常璽帝堯が日月星を觀察することを政務中の最も重要な事としたるが如き、又近頃は世界に首を張かしたる英國政府の天文學家が航海探險の發達を圖るといふ唯一の目的を以て創立せられたるが如き、御學に實用との關係の如何に際りかを示すに非ずや。

爰に實用といふ辭は、世人と共に我々の物質的要求を満足せしむる者といふ意味に用ひたり、然るに人類は物質のみならず精神に用ひたり、吾人の目や耳が感や覺を要求するが如く吾人の精神も如何物を要求す、此精神の要求こそ最も高尚なる者にして一人の以て奮勵に邁る所の主たる點なり、而して吾人目を舉れば直に天を見るが故に、天は人類全體の精神的要求の共同目的物なり、假令天文

學をして所謂實用と何等の關係ならしむるも、猶且吾人の研究を益すと云ふべきなり。

然らず、フレイグマンの言へることあり、數字は此天文學といふ美艷なる宮殿を建てる爲の足場以外ならず、星塔を築き取り除けば宮殿の美觀にも見はるゝと實に然り、此星塔を造りて此宮殿を建築する事は固より我々専門の職事なり、而して此星塔を取り除きて廣く世人に此宮殿の美を賞翫せしむる事も亦我々の仕事ならずはあらず、是即本雜誌の世に現はれたる所以也。

日本天文學會の創立及天文月報の發刊は、既に數年前に於てなれ、總漸く熟して三期の創立會に於て會期等を議定せし後、不幸にして三十七八年の戰役に遭遇し、一時其計畫を中止せしが、今日平和の光復と共に我々精神界の食慾が益々昂く言ふことを得るをば、頗る興奮したるの感候を呈したれば、爰に意を發して本會を組織し本雜誌を發行する事としたるに、幸に多數の大會者も皆て、本會の一大目的たる天文學の普及は前途甚有要なることを認め得たるは、我々の大に喜ぶ所なり、余は茲に願讀者の好意と吾々の熱心とが本雜誌をして益隆の運に向はしむることを祈る。

CONTENTS.

- 1. Introductory Note (H. Tamai)
- 2. Regulations of the Society.
- 3. On Sun Spots. (S. Hasegawa)
- 4. Differential Method of ascertaining the Time of Rising and Setting of the Sun and Moon. (K. Hasegawa)
- 5. Ancient Astronomy (J. Honda)
- 6. Miscellaneous Notes.
- 7. Clavis of the Planets' Paths. (R. Sawada)
- 8. Yesterday-Sky (S. Ogura)

眞等を使うという編集方針だったように伝え聞いている。ほぼこの線に従って毎号が作られていることは読者の書棚にある月報を数冊手に取ってみればわかるであろう。このことはまた日本における天文学の順調な発展を裏書きしているといえる。なお、創刊号表紙の写真を見て御気付きの方もいらっしゃると思うが、天文月報という題字は右書きが左書きになっただけであって、同じ書体が現在も用いられている。これが誰の筆になるものか

浅学にして筆者は知らない。御教示賜れば幸いです。

学問の発展と共に数だけでなく記事の内容も充実してきているように思われる。自分の行った研究をもとにして、その研究分野を紹介することが多いからであろう。これは喜ぶべきことであるが、反面、天文月報の超高級化ともいべき現象にもつながりやすいので、執筆される方々は平易に解説をするよう心されたいものである。